

民族音楽研究者の情報行動からみた東アジアでの 伝統音楽情報サービスに関する予備的考察

Preliminary study of music information services in East Asian countries examined
from ethnomusicologists' information seeking behaviors

伊 藤 真 理

ITOH Mari

Keywords : music information services ethnomusicologist information seeking behavior
East Asian countries

要旨

本研究は、利用者としての音楽研究者の情報ニーズを把握することによって、適切な音楽情報サービスのありかたを検討することを目的としている。このような知見を集積することによって、音楽情報専門家としての音楽ライブラリアンに必要とされる資質を示すことが可能になると考える。その基礎研究として、文化遺産保存のために近年多くの地域でデジタル化が進んでいる伝統音楽分野に着目し、本研究では韓国と台湾を対象として民族音楽学者の情報行動を分析して、両国での音楽情報サービスの現状を考察した。

調査の結果、両国ともに専門職としての音楽ライブラリアンが不在であること、研究者らは歴史的研究手法を主に行っていること、インターネットを活用して情報収集を行っていることなどがわかった。資料のデジタル化や情報提供では、研究者自らがコレクションの構築、情報の組織化にいたるまで主体的に関わっているという現状であった。音楽情報サービスを支える情報専門家の養成と国際的な連携が、喫緊の課題であることが明らかとなった。

1. はじめに

近年、国立国会図書館によるSP盤のデジタルコレクション「歴史的音源」¹⁾などのように、文化遺産としての音楽情報の保存・提供が活発に行われている。しかし、多様な音楽情報を適切に提供するための人材育成は、必ずしも十分に行われているとはいえない。音楽情報専門家の養成についての研究は、組織的な養成の体制が整っているのがアメリカのみであるという現状から、欧米に集中している^{2),3)}。とはいえ、国際音楽資料情報協会（以下、IAML）会員を対象とした調査⁴⁾では、必ずしも確立した教育体制が十分ではなく、アメリカを除けば海外での事情と国内の現状^{5),6)}とは大きな相違はなかった。しかしながら、当該調査はIAML年次

大会参加者を対象としており、いまだ各国支部が設立されていない日本近隣の東アジア諸国の現状については十分に把握できているわけではない。

近年、多くの地域で文化遺産保存のためのデジタル化が進んでいることから、情報の保存・管理・提供といった業務の知識やスキルを検討する必要がある。自国の音楽文化を継承し保存・提供するためには、的確な音楽情報サービス提供のための人材が重要であることは言をまたず、伝統音楽に関する国際会議⁷⁾でも指摘されている。これらのことをふまえ、本研究では、デジタル化が進み、研究過程で特に一次資料へのアクセスが重要であると考えられる伝統音楽分野に着目し、当該分野での利用者としての音楽研究者の情報ニーズを明らかにして、適切な音楽情報サービスのありかたを検討することを目的としている。このような知見を集積することで、音楽情報専門家としての音楽ライブラリアンに必要とされる資質を示すことが可能になると考える。そこで本研究ではまず韓国と台湾を対象として、情報専門家を対象とした調査による伝統音楽分野での情報サービスの実態の把握と当該分野の研究者の情報行動を分析し、両国での音楽情報サービスの現状を考察した。

2. 伝統音楽分野の研究者の情報探索行動

音楽分野の利用者を対象とした情報探索行動研究では、音楽学部学生を対象とした楽譜と録音資料の探索行動に関する研究^{8),9)}、音楽研究者を対象とした研究^{10),11)}、娯楽のための音楽に関する探索行動研究¹²⁾がある。

学生を対象とした情報探索行動研究では、本能的にYouTubeを利用してしまおうとされる学生に対し、与えられた課題をどのように解決するかについて観察調査によって探索行動を把握し、インタビュー調査によってその目的や理由を調べている。その結果、YouTubeなどのウェブサイトは利用のしやすさの面でメリットはあるが、メタデータの不正確さや検索結果が膨大になることなどから、必ずしも有用とは限らず、目的によって使い分けが必要であることがわかった。

研究者を対象としたBrownによる研究では、音楽研究者は手稿資料など一次情報源や雑誌記事、録音資料を重要と考えていることや、他の人文学分野の研究者と同様に特定のオンライン情報資源を頻繁に利用するわけではないことなどが述べられている。またReedらは、芸術学部教員を対象として、学際的な性質を持つ当該分野の研究活動に関して調査を実施した。その結果、多様なフォーマットによる情報はすべて必要と考えられていること、紙の刊行物も利用し続けられていること、当該分野の研究に資するために個人蔵書が構築されていること、研究者らは研究と同様に創作活動にも従事していることなどが明らかとなった。加えて、研究者と図書館員の連携は重要であり、図書館員による連携によって歴史的研究のみならず演奏活動でも、楽譜や展示目録の作成、映像録画収録など様々な支援が可能となっていることが指摘されている。

本研究対象と関連する民族音楽研究者のみを対象とした情報探索行動についての研究では、

Liewらによりインタビュー調査による質的分析が行われている¹³⁾。Liewらは、民族音楽研究者がどのように図書館サービスを利用しているか、提供されている図書館サービスが彼らの情報ニーズにどの程度合致しているのかについてほとんど研究されていないことに着目し、ニュージーランドの大学に所属する民族音楽研究者14名に対し、半構造化インタビュー調査を実施した。その結果、情報探索では多様な手法がとられていることが明らかとなった。調査協力者らは主な情報源として図書館を利用しているが、大学図書館だけでなく公共図書館も利用していることや、必ずしも図書館サービスに満足しているとはいえず、個人コレクションを構築して、当該分野での研究に自ら寄与していることもわかった。さらに、調査協力者らは、その他の分野の利用者と同じく、インターネットなどの図書館蔵書以外の情報資源を利用し、自分自身で情報を探し評価することが求められていた。Liewらによれば、こうした結果は、先行研究での知見と同様であった。そして、調査で明らかとなった民族音楽研究者の情報ニーズへの要求に対応するために図書館員が果たす役割は大きく、図書館と大学との連携の可能性に期待している。

このように、民族音楽研究者は多様な研究手法を用いて、多方面にわたる資料や情報を収集するために工夫をしていることが明らかとなっている。しかし、東アジア諸国での民族音楽研究者に関してはいまだ調査研究が行われていないことから、図書館サービスの実態を把握するとともに、利用者である研究者のニーズに対する適切なサービス提供を検討する必要がある。

3. 音楽情報サービス調査

3.1 調査方法

上述の通り、東アジア諸国の事情については、国際的な場での情報提供がほとんどない。本調査では韓国と台湾を対象を絞り、これらの国での伝統音楽保存とサービスの実態を把握することとした。本調査では音楽研究者の情報ニーズを把握することによって、音楽情報サービスの提供において必要とされる要素を分析することを目的としているが、研究者らがおかれている現状を把握するために、音楽図書館や博物館職員（以下、情報専門家と称する）に対しても調査を実施した。これは、伝統音楽情報サービスを提供している担当者がどのような教育や経歴を持ち、業務遂行上で何が必要と考えているのかを把握するためである。体系的な人材養成が進んでいないことを前提としているため、当該分野の関係者に掘り下げた質問ができるよう、インタビュー調査（一部アンケート調査）を実施することとした。

インタビュー調査は、あらかじめ質問項目を定めた半構造化形式とした。情報専門家については、調査協力者の属性の他に音楽文化遺産の保存と活用に焦点をあてて必要とされる知識やスキルについて質問した（付録A参照）。研究者を対象とした調査では、Liewらの研究¹⁴⁾に基づき、図書館サービスの利用に関する質問を追加して作成した案について、筆者の同僚が不明瞭な点や不整合な点がないかを確認して最終的な質問項目を決定した（付録B参照）。

調査協力者は、情報専門家5名（表1参照）と、研究者15名（表2参照）である。Liewら

の研究と同様に、全員が学術機関所属である。インタビューはすべて英語で実施したが、英語が得手ではない調査協力者も含まれたため録音することが困難であった。そこで調査の記録については、調査者が回答に関するメモをとり、調査終了後にデータを整理した。1回の調査は、40分から1時間程度であった。

表1 調査協力者（情報専門家）の属性

所属	国立国楽院 国楽博物館	国立台湾大学中央図書館 マルチメディアセンター	国立台湾大学中央図書館 特別コレクション課
身分	専任2名	専任1名	専任2名
担当業務	アーカイブデータ作成	マルチメディアデータ作成	アーカイブデータ作成
専攻分野	民族音楽(舞踊, 楽器)	図書館情報学	図書館情報学
関連資格	大学院在籍(アーカイブ専攻)中	司書	司書, MLS(ミシガン大)

表2 調査協力者（研究者）の属性

所属	国立国楽院 国楽博物館	梨花女子大学 音楽学部※	国立台湾大学 音楽学部	国立台湾師範大学 民族音楽研究所	国立台湾歴史 博物館
身分	専任研究員 1名	非常勤講師 1名 大学院生 7名 研究科院生 3名	専任教員 1名	専任教員 1名	専任研究員 1名

※ アンケート調査法での実施

韓国では、調査対象とする情報専門家について音楽図書館領域の該当者がおらず、アーカイブセンター職員2名に対して同時にインタビューを実施した。これは調査実施年度に中東呼吸器症候群(MERS)が発生し、調査実施時期の決定が遅れたことも影響している。また、研究者を対象とした調査の内11名については、筆者が参加した東アジア音楽を対象とした国際会議¹⁵⁾の開催期間中に、参加者を対象としてアンケート配布の許可を得て実施した。アンケート調査での質問項目は、インタビュー調査と同一である。

台湾では、国立台湾師範大学音楽図書館にアメリカで音楽図書館情報学を学んだライブラリアンがおり、音楽分野での唯一の情報専門家として活躍しているが、当該図書館では伝統音楽を対象としたサービスを提供していない。したがって、伝統音楽分野を担当する音楽情報専門家は存在しないとのことであった。そこで、伝統音楽を専門としているのではないが大学図書館で伝統音楽分野の資料を扱っている担当者に協力を依頼した。研究者に関する調査は、大学教員2名と博物館研究員1名を対象とした。

3.2 伝統音楽情報サービスの現状

3.2.1 情報専門家の実態

調査対象とした韓国と台湾での伝統音楽情報に関するサービス実態の把握に関しては、情報専門家を対象として彼らが業務を通じて経験している課題についての情報を収集した。韓国と台湾では音楽図書館情報学分野での養成の組織的な体制がなく、現時点では後進の育成の可能性もない。そのため、最終学歴で専攻した学問分野と担当業務等に基づいて検討した。

韓国での調査協力者2名は、国立国楽院国楽博物館職員で、舞踊や楽器など専攻は異なるが国楽を学修している。現在の業務は当機関で収集された資料に対するメタデータの作成である。そのため、現在大学院に所属してアーカイブについて学んでいる。図書館情報学については組織的な教育を受けているわけではない。また、著作権や保存について国家記録院、国立民俗博物館等でのオンライン研修やワークショップ、講演会に参加している。

台湾での調査協力者3名は全員司書資格を有しているが、音楽の専門教育を受けていない。特別コレクション課職員1名は、現在大学のアーカイブのコースを受講しており、その他の2名はオンザジョブトレーニングの形でスキルを習得している。台湾では、特に定期的な外部研修が実施されているわけではないとのことであった。業務上の疑問点等については、国立図書館や専門分野の研究者へ問い合わせるなどをして対応している。

上述のとおり、台湾では情報専門職の養成が不可能なことから、国立台湾師範大学の民族音楽研究所では職員を海外に派遣して人材の養成をはかっていた。1人は、オーストリアの録音映像資料アーカイブ研究所Osterreichische Akademie der Wissenschaften, Phonogrammarchiv¹⁶⁾で12日間の研修（Training course on Audio Preservation, Restoration and Digitization Physical Treatment, Recovery and Transfer）を受講し、もう1人はアメリカ議会図書館の映像資料課で研修したとのことであった。なお両名については、他の調査協力者と研修経験が異なり、自国の状況を正確に反映できないことから本調査対象としなかった。しかし、彼らが海外で研修を受講しなければならないという事実は、当該国の事情に大きく関連していることには留意すべきである。

また、対象とする分野が拡散してしまうため本調査対象に加えなかった機関として、韓国国立民俗博物館と台湾国立傳統藝術中心がある。韓国国立民俗博物館では、祭礼などに関連した舞踊や演奏などを披露し、教育活動を行っている。同館は“1946年国立民族博物館として開館して以来、韓民族の傳統生活文化を調査、研究、収集し、これを多様な展示と報告書、講演会の形態で公開”している¹⁷⁾とのことである。

台湾の国立傳統藝術中心（国立傳統藝術センター）は、当センターのウェブページによれば¹⁸⁾、“2002年1月に創設された行政院文化建設委員会（以下文化建設委員会と略称）の附属機関です。主な業務は全国傳統藝術の保護、調査、研究、保存、伝承、発展などの業務を統括して計画することですが、その他にも民間の活動力と人材、物資を導入した純粋な公共サービスに属し、公権力の影響を受けない施設を民間の専門業者に委託経営させています”との説明

があり、台湾の伝統演劇と音楽を統合して、伝統芸術の文化政策を遂行している機関である。なお、本調査実施期間では、音楽部門の移転作業のため音楽図書館は閉館中だった。

3.2.2 業務で認識されている課題

情報専門家が業務で経験している課題を把握するために、伝統音楽の保存や情報提供、および研究者との連携において重要と考えることや問題点について質問した。

国立国楽院では、1995年に設立された博物館の趣旨として貴重資料等の保存・管理が含まれているため、伝統音楽の保存に積極的に取り組んでおり、保存に関しては一連の業務プロセスが確立されている。それに対して、国立台湾大学中央図書館マルチメディアセンターや国立台湾歴史博物館では、SPレコードやLPレコードコレクションを対象としたプロジェクトが進められているが、これらの資料の扱い方などについての技術情報不足が課題としてあげられていた。

情報提供の観点では、国立国楽院職員はメタデータの統一の必要性をあげている。主題分析に関して、韓国では一般に分類記号として韓国十進分類法が使用されているが、国楽院は独自の分類システムを構築しているため、韓国十進分類法とのマッピングをしている。このような工夫をしているものの、現場ではどういうメタデータを作成するかについて混乱しているとのことだった。

同様の指摘は、台湾大学中央図書館職員からも示された。彼らが行っているプロジェクトでは、大学所属教員である研究者が主導してコレクションの整理を行っている。各コレクションに対して目録が作成されるが、それらの書誌事項については研究者からの指示を仰いで確定しているとのことであった。また不明な事項について、研究者や国立図書館等に問い合わせをしていた。このような対処療法的な対応ではなく、将来的な展望に立った情報整理のあり方が必要であると認識していることがわかった。

調査協力者（情報専門家）は全員、担当する音楽情報の専門分野の研究者の支援を受けており、何らかの方法での連携がなされていることがわかった。上述のとおり、例えば分類記号付与において専門的な知識が必要となる場合には、研究者に直接問い合わせることで解決していた。しかし、特に台湾では資料のデジタル化や保存等に関連する団体や組織もないため、研究者の支援を得て連携をしているものの、これらの業務全体のありかたについて手探りの状態であるといえる。

最後に、業務で重要と考えられる知識について選択式で訊ねたところ、伝統音楽、メタデータ作成、データベース構築、楽器や情報源の保存方法に関する知識の必要性があげられた。

3.3 民族音楽研究者の情報探索行動

3.1で述べたように、本調査では研究者に対して研究活動における情報利用についての調査を行った。伝統音楽研究での情報収集では、西洋芸術音楽研究よりもさらに多様な一次情報利

用の重要性が大きくなることが推測され¹⁹⁾、フィールドワークを中心とした情報収集が行われると仮定して調査を実施した。

研究者に対する質問では、日常的な研究活動を把握するために、（１）主な研究方法、（２）重要と考える情報媒体、（３）主に利用する機関と検索ツール、（４）一次資料の利用、（５）図書館サービスの利用、（６）情報探索での心理的状态、（７）情報探索での問題について質問した。

（１）主な研究方法

表３に示したとおり、伝統音楽研究においてもフィールドワークだけでなく歴史研究は重要であり、調査協力者（研究者）のほぼ全員が歴史的な手法による文献調査を重要な研究活動の一部としていることがわかった。

表３ 主な研究方法（複数回答可）

	(件)
歴史的研究	14
フィールドワーク	4
演奏・創作活動	0
その他	0

（２）重要と考える資料媒体

本調査協力者（研究者）が重要と見なしている資料媒体については、表４のとおり録音映像資料が多かった。その理由として、音楽は音によって伝わるもので言葉では表せない、音楽は音響の芸術だから、という意見が多く見られた。また、電子情報資源については、便利であること、海外の文献も入手できることなど、当該媒体の利便性があげられた。

表４ 重要と考える資料媒体（複数回答可）

	(件)
印刷媒体	6
電子情報資源	8
録音映像資料	10

（３）情報収集で利用する機関と検索ツール

資料の入手先については、図書館が最も多かった（表５参照）。その他にあげられたのは、研究に関連するウェブサイト、YouTubeなどインターネット上の情報であった。

表5 資料の入手先（複数回答可）

	(件)
個人コレクション	1
図書館	9
公文書館	4
博物館	1
美術館	0
その他	3

情報収集のために主に利用する機関は、所属機関の附属図書館、外部図書館等を利用しており、一般的な文献探索と類似の利用状況であるといえる（表6参照）。調査協力者（研究者）の中には、博物館や美術館などの機関も選択している場合があった。

利用する機関から推測できるように、利用する検索ツールは、図書館で提供している芸術・人文学分野の書誌データベースなどであった。「その他」のツールとしてRISM、JSTORがあげられていたが、これは回答の選択肢に含まれていなかったことによるもので、決して特殊なデータベースではない。上記のデータベースはいずれも音楽文献検索では基本的なツールであり、本調査回答では伝統音楽研究に限定した特徴的な事柄は見られなかった。ただし、主に利用する機関という質問に対して自館を利用するという回答が多かったことに比較すると、利用するツールとして「OPAC」を選択したのは1件のみであったことには注意すべきであろう。ツールの選択は、伝統音楽の演奏が多く試聴できるYouTubeや研究に関連するウェブサイト、検索エンジンの利用などに分散していた。

表6 主に利用する機関と検索ツール（複数回答可）

	(件)		(件)
所属機関附属図書館	13	RILM	5
外部図書館	2	Humanities Index	0
博物館	2	IIMP/ Music Index	1
公文書館	1	OPAC	1
美術館	1	検索エンジン	5
その他	2	メーリングリスト	1
		その他	3

さらに、研究対象となっている資料のデジタル化などの保存・管理に関して、本人の研究自体に関わることはないが間接的に必要な情報については、個人的に知己の専門家に対して質問や協力の依頼をすることが説明された。また、国際音声・視聴覚アーカイブ協会（IASA）など国際的な図書館・アーカイブ関連機関のメーリングリストやウェブサイトを参照して有用な情報を入手するという意見もあった。このように、調査協力者（研究者）らは情報収集にお

いて、自らの人的ネットワークやインターネットで得られる情報を活用していることがわかった。

最新情報の入手方法については、表7にまとめた。関連団体や人的資源よりも出版情報が多かった。「その他」については、コンサートプログラム、パンフレット、RISMデータベースの情報があげられた。

表7 最新情報の入手方法（複数回答可）

	(件)
関連団体のニューズレター	1
会議、研究会	3
ビデオ	0
出版情報	6
人的資源	3
その他	2

上記一連の結果から、本調査協力者（研究者）らはインターネットを検索ツールとして重要と見なしていると考えられる。これは、調査協力者15名の内1名以外が「インターネットは役に立つ」と回答していることにも示されている。本調査では、インターネットを効果的と思わないという意見の調査協力者からはその理由が得られなかったが、重要と見なしている調査協力者があげた理由は、図書館に行かなくても楽譜が入手できる、情報にアクセスしやすい、新しい見解に関する情報を入手できる、いつでもどこでも多様な情報を利用できる、などであった。

（4）一次資料の利用

一次資料の入手方法については、表8のとおり「図書館で借りる」という回答が多かった。これは上述の情報の入手に関して図書館を利用すると回答していることと関連していると思われる。「その他」であげられたのは、ウェブサイトの利用、寄贈、コレクションの寄託による入手である。

表8 一次資料の入手方法（複数回答可）

	(件)
購入	4
図書館で借りる	10
同僚から借りる	2
自分で創作	0
演奏の鑑賞、観察	1
その他	3

西洋芸術音楽研究との違いについて訊ねたところ、伝統音楽の場合にはウェブ上で多くの情報資源を見つけることができるが西洋芸術音楽ではそのような機会が見られない、西洋芸術音楽では録音資料を含むオリジナル資料の入手が困難であるという意見があった。このように伝統音楽の一次資料の利用について、インターネットを利用するなど比較的容易に一次資料を入手できると考えていることがわかった。

本調査協力者（研究者）らは、研究対象分野の関係者と研究活動を通じたつながりがあり、博物館等へ資料保存のための寄贈を受けていた。そのため、寄贈や寄託を受けたコレクションが彼らの研究対象資料であり、あえて資料を探索する必要がない場合が多かったことも、資料の入手について大きな問題を持っていると意識していないことに影響しているかもしれない。

（5）図書館サービスの利用

図書館サービス利用について、図書館間相互貸借（以下、ILL）の利用と図書館サービスによる利便性について訊ねた。ILLについては、「時々利用する」という回答が最も多く、これまでの回答からもわかるとおり、資料へのアクセスや入手について図書館利用が最も多いことから、ILLサービスの利用にも関連していると考えられる。

また、調査協力者（研究者）各自のプロジェクト遂行に際し、図書館で問題解決ができたかどうかについて訊ねたところ、「できた」という回答と「できない」という回答がほぼ同数であった。肯定的な回答では、自分が探していた楽譜をインターネット上で見つけてもらえたという意見があった。否定的な回答では、音楽ライブラリアンは音楽史や音楽資料について理解すべきであることや蔵書をもっと充実させるべきであるという意見があげられた。加えて、デジタル化の知識を持つ専門家がいないうこと、専門団体・協会が存在せず問題を共有することができないことなどが指摘された。

（6）情報探索での心理的状態

Liewらの研究では、クールソーの情報探索プロセスモデルに基づき、様々な情報探索活動で起こる感情を分析している。具体的には、図書館蔵書目録の利用、館内蔵書のブラウジング、図書館員への相談、インターネット検索、の4つの探索に関わる活動でどのような気持ちになるかを訊ねたものである。本調査でも同様の方法で実施し、その結果を表9に示した。

本調査では、図書館での検索について不安に感じているという回答は少なかった。これは、本調査協力者（研究者）が主に学術機関に所属している研究者や大学院生であることが理由として考えられる。

表9 情報探索プロセスでの感情

						(件)
	とても自信がある	自信がある	普通	少し不安	とても不安	コメントなし
図書館蔵書目録の利用	0	4	5	1	1	4
館内蔵書のブラウジング	1	3	7	0	0	4
図書館員への相談	0	2	6	1	0	6
インターネット検索	2	3	5	1	0	4

(7) 情報探索での問題

上記の探索活動で生じる感情の原因を明らかにするために、Liewらの研究であげられていた選択肢に基づいて質問した結果が表10である。関連する資料の不足や入手について問題があると考えていることがわかるが、コメントにおいても、資料の不足と情報の正確性の判断について繰り返し指摘があった。

また表10の結果から、本調査協力者（研究者）では、探索プロセスにおいて著作権が問題となることについての認識があるが、Liewらの研究で指摘された言語についてはほとんど問題とされていないと判断できる。

表10 情報探索での問題

							(件)
	資料の不足	言語	著作権	予算	資料入手	コメントなし	
図書館蔵書目録の利用	5	0	2	2	1	5	
館内蔵書のブラウジング	1	1	3	0	4	6	
図書館員への相談	4	1	1	0	5	4	
インターネット検索	3	1	1	0	3	7	

4. 考察

本章では、伝統音楽分野での情報サービスの実態と当該分野の研究者の情報行動に関する調査結果に基づき、音楽情報サービスのあり方について考察を行う。

情報専門家に関して、韓国での調査協力者は国楽を学修しており、伝統音楽分野の知識を持つが、直接業務に関わる情報組織化やデジタル保存・活用に関する知識を有しているわけではなかった。台湾での調査協力者は音楽の専門知識はないが図書館情報学を学修しており、司書資格を有していた。本調査で対象とした韓国と台湾では、日本と同様に組織的な音楽図書館情報学教育は提供されておらず、音楽と情報サービスの両方の専門家としての知識を有している職員によるサービスが実施されていなかったことが明らかとなった。本研究の冒頭で述べたように、伝統音楽分野ではデジタル化による情報の保存・活用が促進されており、本調査におい

でも調査協力者（情報専門家）らはデジタル化プロジェクトに関わっている。デジタル化プロジェクトの遂行において、特に伝統音楽の情報に関する標準的なメタデータの検討とそれに関する知識の習得の必要性が指摘された。加えて、調査協力者（情報専門家）らが従事する業務の状況から、図書館サービスだけでなくアーカイブの知識が必要であることが認められた。

このような環境で、本調査協力者（研究者）の情報行動は以下のような結果であった。すなわち、主とする研究活動は歴史的研究手法によっており、図書館で人文・芸術分野のデータベースを使用して文献探索を行うことが中心であった。これは、一般的な文献探索活動と大きく異なることはなかった。

本調査協力者（研究者）らは、インターネットを有効なツールであると評価し、活用していることもわかった。Liewらの研究においても同様の結果が示されており²⁰⁾、デジタル化時代においては特異なこととはいえないことがわかる。また、本調査協力者（研究者）らは学術機関所属であるため、資料へのアクセスや入手に関して図書館を利用することについても抵抗がなく、自信を持って行動していたことが明らかとなった。

しかし、後述のとおり、本調査協力者（研究者）らが図書館での情報収集や資料の入手に関しては問題があるという認識を持っていることも明らかとなっている。音楽図書館がないことや、当該分野の情報専門家がいないことなど、本調査協力者（研究者）らが置かれている環境を考えると、インターネットへの依存や情報アクセスへの自信は、図書館に依存できないことを示していると推察することも可能であろう。

本調査協力者（研究者）らが研究活動で重要と考える情報媒体として、録音映像資料が多かった。これは、音楽が音の響きを確認することが第一義であることから当然といえる。また、西洋芸術音楽との違いとしてあげられていたコメントには、伝統音楽はインターネット上で多くの録音情報が得られるという指摘があった。このことは、上述のようにインターネットを活用していることの、もう一つの理由としても考えられる。

さて、本調査結果3.3（7）「情報探索での問題」として、図書館での資料の不足と資料入手の問題が指摘された。これらの調査結果は、3.3（4）「一次資料の入手」に関して「図書館で借りる」という回答があげられていたことと矛盾しているように思われる。しかし、（7）については、本調査協力者（研究者）らが日常的に図書館での資料収集の不足や資料の入手の問題を認識しており、回答で指摘しているとも考えられる。また資料不足のために、インターネットに依存せざるを得ない事情もあることから、やはりコレクション形成の問題が大きいと理解すべきであると思われる。加えて、本調査では一次資料が何を意味するのかを明示していなかったため、調査協力者によって語の理解が異なる可能性があることも考慮すべきである。

資料の入手での問題について、本調査結果から図書館でのILLサービスについては理解されていると判断できる。しかし、本調査協力者（研究者）らは情報探索プロセスで問題が生じた場合には、所属図書館によるレフェラルサービスを受けるというよりも、自らが研究活動で構築している人的ネットワークを介して必要な情報を直接入手しているようであった。例え

ば、海外で文献が必要な場合、図書館を通じてILLのリクエストをするよりも、研究仲間を通じて当該文献を参照するといった具合である。これもまた、上述のように図書館に依存できないという本調査協力者（研究者）らの認識が情報行動に表れた結果であると考えられる。

さらに、本調査協力者（研究者）らは、情報の正確性について判断することに不安があること、著作権について問題を認識していることがわかった。これらの問題については、研究者に対する情報リテラシー教育支援を充実させることが重要であり、図書館員がその専門性を発揮して、任を果たすことができる。しかし、そもそも図書館員の専門性が十分に確立していないため、本調査協力者（研究者）らにもその意識がないことが推察される。

これらの分析結果から、音楽情報サービスのあり方に関してこれから取り組むべき課題として2点あげることができる。1点目は主題情報専門家としての図書館員の役割について認識を高めるための方法を検討することである。そのためには、まず情報専門職としての人材養成をどのように行うことができるのかを検討することが必要となるであろう。上述のとおり、情報専門家の必要性に対して利用者（本調査では研究者）によるニーズがあることは明らかである。本調査結果で明らかとなった適切な資料の提供の必要性、資料の入手や情報リテラシー教育における図書館員の役割については、Liewらの研究でも指摘されているとおりである²¹⁾。

さらに、メタデータ作成において図書館員の専門性が問われている。Liewらの研究では分類法の問題が指摘されていた²²⁾が、本調査では情報専門家からも研究者からもコレクション構築の際のメタデータの問題が指摘されていた。メタデータに関しては、音楽著作権とともに音楽ライブラリアン養成において必須の専門知識としてあげられている²³⁾。加えて、日本音楽学会が中心となって実施した『「日本の音楽資料」のデータベース化のための調査研究』²⁴⁾で明らかにされた、楽譜資料の書誌情報調査を通じて顕在化した書誌情報作成の不備と人材の不足という課題にもつながる問題である。したがって、まずメタデータを作成する知識とスキルを備えた音楽情報専門家の養成を実施していくことが肝要であると考えられる。

2点目は、国際的な協力関係の構築である。上述のとおり日本を含め、本調査対象の韓国と台湾では人材養成の体制が整っていない。自国内で研鑽を積むことも重要であるが、有用な情報を海外の専門機関と共有して、知識やスキルを蓄積していくことも求められる。国内に該当する組織がないため、海外との連携が進めにくいことも事実であろう。台湾師範大学民族音楽研究所での事例のように、独自に人材養成に努めている機関もあるが、後進の育成や情報交換など効果的であるかどうかは不明瞭である。何より、人材育成に理解のある環境であるかどうかによって派遣の機会も得られるかどうか不明である。この点に関して、筆者が参加した梨花女子大学での国際会議開催を通じた情報交換は、1つの解決策としてあげることができる。当会議は、主に研究者の参加となっているが、それぞれ自国の情報専門家を積極的に参加させて、海外の同業者らとの交流の場とすることも検討してよいであろう。

こうした国際間の協力体制の検討は、1点目の情報専門家養成でのメタデータの知識・スキル習得においても関係すると思われる。例えば、国立台湾大学や国立台湾歴史博物館で進めら

れているプロジェクトでは、日本の占領期の資料が対象となっている。これらの資料は国立国会図書館の「歴史的音源」内のデータと重なる。したがって、「歴史的音源」データベース構築でのノウハウを活かした国際的な連携の可能性が十分にある。国立国会図書館の2016年2月1日現在の当該サービスにおける海外でのパートナー図書館のリストには、アメリカ、フランス、ドイツのみで、東アジア地域の国は入っていない。少なくとも類似の資料を対象としたデータベース化について、近隣諸国と各国の状況に関する情報を広く公開する必要があると思われる。

5. まとめ

本研究は、適切な音楽情報サービスのありかたを検討するという目的のもと、韓国と台湾を対象を絞り調査を実施することによって、東アジアでの音楽情報サービスの状況を分析・考察した。調査の結果、両国ともに専門職としての音楽ライブラリアンが不在であることや、主にインターネットを活用して情報収集を行っていることがわかった。情報収集に必要な資料のデジタル化やデータベース作成では、研究者自らがコレクションの収集、情報の組織化にいたるまで主体的に関わっているという現状であった。しかし、図書館職員やアーキビストらも研究者と協力することによって、情報組織化と提供を積極的に検討しており、音楽情報サービスを支える情報専門家の養成と国際的な連携が喫緊の課題であることが明らかとなった。

今後は調査対象範囲を広げるとともに、日本固有の伝統音楽分野での情報サービスの状況について、現状の把握と分析を進める必要がある。

謝辞

本研究を進めるにあたり、快く調査にご協力いただいた皆様、有益な助言を下された同僚にお礼申し上げます。また、本研究は、平成27年度愛知淑徳大学特定課題研究助成費を受けた。

文献リスト

- 1 国立国会図書館. 「歴史的音源」. rekion.dl.ndl.go.jp, (2016-02-05参照).
- 2 Oates, Jennifer. "Music librarianship education," Music Reference Services Quarterly. 2004, vol. 8, no. 3, p. 5-6.
- 3 Clark, Joe C. "What employers want: entry-level qualifications for music librarians," Notes. 2013, vol. 69, no. 3, p.472-493.
- 4 Itoh, Mari. Results from the questionnaire about music librarianship education. International Association of Music Libraries, Documentations Annual Conference, Expo Centro Congressi Terminal Napoli, Naples, July 22, 2008.

- 5 伊藤真理, 松下鈞. 「音楽ライブラリアンの養成に関する考察：音楽図書館関連団体による研修の分析」日本図書館情報学会誌. 2014, vol. 60, no. 3, p. 87-105.
- 6 伊藤真理. 「文化庁委託調査報告書からみる音楽ライブラリアンの資質要件」愛知淑徳大学大学院文化創造研究科紀要. 2014, vol. 1, p. 1-18.
- 7 Keeping Music Alive. 梨花女子大学, ソウル, 2013年11月8-10日.
- 8 Dougan, Kirstin. Information seeking behaviors of music students. Reference Services Review. 2012, vol. 40, no. 4, p. 558-573.
- 9 Dougan, Kirstin. Finding the right notes: an observational study of score and recording seeking behaviors of music students. The Journal of Academic Librarianship. 2015, no. 41, p. 61-67.
- 10 Brown, Christine D. Straddling the humanities and social sciences: the research process of music scholars. Library & Information Science Research. 2002, vol. 24, p. 73-94.
- 11 Reed, Bonnie; Tanner, Donald R. Perspectives on information needs and library services for the Fine Arts faculty. The Journal of Academic Librarianship. 2001, vol. 27, no. 3, p. 229-233.
- 12 Laplante, Audrey; Downie, J. Stephen. The utilitarian and hedonic outcomes of music information-seeking in everyday life. Library & Information Science Research. 2011, no. 33, p. 202-210.
- 13 Liew, Chern Li; Ng, Siong Ngor. Beyond the notes: a qualitative study of the information-seeking behavior of ethnomusicologists. The Journal of Academic Librarianship. 2006, vol. 32, no. 1, p. 60-68.
- 14 Liew, et al., p. 67.
- 15 East Asian Music Research in the Digital Age. 梨花女子大学, ソウル, 2015年9月12日.
- 16 Phonogrammarchiv. <http://www.phonogrammarchiv.at/wwwnew/index.htm>, (2016-02-05参照).
- 17 国立民俗博物館. 「博物館のご紹介」. http://nfm.go.kr/language/japanese/htm/muse0_greeting.htm, (2016-02-05参照).
- 18 国立傳等藝術中心. 「センター紹介」. http://www.ncfta.gov.tw/ncfta_jp/j05/index.aspx, (2016-02-05参照).
- 19 Liew, et al., p. 60.
- 20 Liew, et al., p. 66.
- 21 Liew, et al., p. 66.
- 22 Liew, et al., p. 66.

²³ Itoh, 2008.

²⁴ 『「日本の音楽資料」のデータベース化のための調査：報告書』（平成21年度文化庁委託業務「音楽情報・資料の収集及び活用に関する調査研究」）。日本音楽学会「日本の音楽資料」調査委員会，2010，62p.

付録

付録 A. インタビュー調査質問項目（情報専門家）

Institution name:	[]
Position: <input type="checkbox"/> full-time <input type="checkbox"/> part-time		
Services (section) responsible for:	[]
Professional certificate (if applicable):	[]
Major at university (and/or) graduate school:	[]
Professional membership:	[]
Trainings taken for recent 5 years:	[]
Continuing education taken for recent 5 years:	[]
What are indispensable issues to preserve historical heritage sources?:	[]
What are problems for the preservation?:	[]
What are important to provide appropriate services on traditional music information?:	[]
What are problems to be solved on it?		
Do you collaborate with the researchers for your library services?	<input type="checkbox"/> YES	<input type="checkbox"/> NO
If yes, the details of collaboration:	[]
Are there any problems to be solved?	<input type="checkbox"/> YES	<input type="checkbox"/> NO
What are they?:	[]
If no, any possibility to collaborate with other librarians?	<input type="checkbox"/> YES	<input type="checkbox"/> NO

付録 B. インタビュー調査質問項目（研究者）

1. Institution name belonged: []
2. Position: Full-time Part-time Graduate student Post-graduate
3. Research area: []
4. Research methods mainly: Historical approach Fieldwork Performance
 Other []
5. Which institutions do you regularly use? (check any if applicable)
 Your university library Other library Museum Archives Art galleries
 Other []
6. What tools (databases, etc.) do you regularly use to find information on your research topic? (check any if applicable)
 RILM Humanities Index IIMP Particular institution's OPAC Search engines
 E-mail lists Other []
7. Do you find the Internet useful for your research? YES NO
8. Why is it?
9. How do you get primary information sources? (check any if applicable)
 Purchase Borrow at library Borrow from your colleagues Create by yourself
 Observe performances Other []
10. Do you use the service of Interlibrary loans?
 Very often Sometimes Rarely Never
11. What information resources do you use other than the Internet to keep up-to-date with information? (check any if applicable)
 Association newsletters Conferences Videos Publishers lists
 Human resources (Other ethnomusicologists, colleagues, friends) Other []
12. What are types of formats that are important to support your research and teaching?
 Print E resources Audio visual sources Other []
13. Why are the formats important?
14. Where can you access these formats? (check any if applicable)
 Personal collection Libraries Archives Museums Art galleries Other
15. How often do you use these formats?
 Every day Weekly Once every two weeks Once a month Occasionally
16. What are your feelings when searching for information:
 - 16-1a. In the library using the library catalog?
 Very confident Confident Average Nervous Very nervous
 - 16-1b. Why is it?
 - 16-2a. By browsing through the library collection?
 Very confident Confident Average Nervous Very nervous
 - 16-2b. Why is it?
 - 16-3a. Consulting librarians?
 Very confident Confident Average Nervous Very nervous
 - 16-3b. Why is it?
 - 16-4a. On the Internet?
 Very confident Confident Average Nervous Very nervous
 - 16-4b. Why is it?
17. Do you face any barriers when searching for information (check any if applicable):
 - 17-1. In the library using the library catalog?
 Lack of materials Language Copyright Cost Availability of materials
 Other (Please write the details) []
 - 17-2. By browsing through the library collection?
 Lack of materials Language Copyright Cost Availability of materials
 Other (Please write the details) []
 - 17-3. Consulting librarians?
 Lack of materials Language Copyright Cost Availability of materials
 Other (Please write the details) []
 - 17-4. On the Internet?
 Lack of materials Language Copyright Cost Availability of materials
 Other (Please write the details) []
 - 17-5. Other (if any)
18. Do you collaborate with the librarians for your research activities? YES NO
 - 18-1a. If yes, the details of the contents about the collaboration
 - 18-1b. Are there any problems to be solved to improve you project? YES NO
 - 18-1c. What are they?
 - 18-2. If no, any possibility to collaborate with librarians? YES NO
19. What do you think major differences between the traditional music study and western art music study on usage of resources?
20. Do your library promptly deliver their services to solve problems on your study? YES NO
21. Are there any requests for library services to improve your research surroundings?